

マルクスは「比類なく困難な問題」を解決したのかしなかったのか

建 部 正 義

目 次

- 1 問題の限定
- 2 大谷氏の見解
- 3 大谷氏の著書にたいする筆者の批判
- 4 小林賢齊氏の著書にたいする筆者の書評
- 5 貨幣資本と現実資本との関連という第1の問題をめぐって
- 6 貨幣資本と貨幣量との関連という第2の問題をめぐって
- 7 マルクスは「最終的な解答」を与えなかったとする大谷氏の論拠
- 8 「資本のプレトラ」という問題をめぐって
- 9 マルクスは「最終的な解答」を与えなかったとする大谷氏の論拠
——再論
- 10 むすびに代えて

1 問題の限定

大谷禎之介氏は、『マルクスの利子生み資本論』第3巻『信用制度下の利子生み資本論（上）』（桜井書店、2016年）のなかで、「〔K. マルクスによる『資本論』〕草稿第5章の『5 信用。架空資本』の本論は『I)』-『III)』の部分であるが、このうちの『III)』こそはその本論の核心にあたるどころであり、したがって、ここでマルクスが、なにをどのように論じているかということを正確に読み取ることが、マルクスの利子生み資本論の理解にとって決定的に重要であることは言うまでもない」（202-203ページ）、と指

摘する。

そして、この「Ⅲ）」のもっとも基本的なテーマが「monied Capital」と「現実資本」との関係、ならびに、「monied Capital」と「貨幣量」との関係にあることには、おそらく、何人も異存はないところであろう。

じっさい、エンゲルス版第30章の冒頭の部分（上記のマルクスの草稿の冒頭の部分）では、次のように問題が提起されている（以下でのマルクスの草稿からの引用については、大谷氏による訳文を利用させていただいた）。

「これから取り組もうとしている、この信用の件〔Creditgeschichte〕全体のなかでも比類なく困難な問題は、次のようなものである。——第1に、本来の貨幣資本の蓄積、これはどの程度まで、現実の資本蓄積の、すなわち拡大された規模での再生産の指標なのか、またどの程度までそうでないのか？ いわゆる資本のプレトラ（この表現は、つねに monied Capital について用いられるものである）、——これは過剰生産と並ぶ一つの特異的な現象をなすものなのか、それとも過剰生産を表現するための一つの特異的な仕方にすぎないのか？〔第2に、〕monied Capital の過剰供給は、どの程度まで、停滞しているもろもろの貨幣量（鑄貨、地金または銀行券）と同時に生じ、したがって貨幣量の増大で表現されるのか？」。

ここには、二つの問題が提起されているが、そのうちの第1の問題については、エンゲルス版第31章の冒頭の部分で、次のように繰り返されている。

「しかし、ここでの問題はそもそも、どの程度まで monied Capital の過多が、あるいはもっと適切に言えば、どの程度まで貸付可能な

monied Capital の形態での資本蓄積が現実の蓄積と同時に生じるのか、ということである」。

さらに、エンゲルス版第32章の前から3分の1の部分では、さきほどの二つの問題が、あらためて、次のように指摘し直される。

「さて、二つの問題に答えなければならない。第1に、monied Capital の相対的な増大または減少は、要するにその一時的なまたはもっと継続的な蓄積は、生産的な資本の蓄積とどのような関係にあるのか？ そして第2に、それは、なんらかの形態で国内にある貨幣量はどのような関係にあるのか？」。

大谷氏は、マルクスによるこうした三つの問題提起を受けるかたちで、この「Ⅲ」のもっとも中心的なテーマを、以下のように整理する。すなわち、「ここで提起されている二つの問題とは、第1に、『本来の monied Capital の蓄積』と『現実の資本蓄積』との関連を問う問題であり、そのキーワードは『monied Capital』と『現実資本』である。第2に、『monied Capital』と『停滞している貨幣の量』との関連を問う問題であり、そのキーワードは『monied Capital』と一国にある『貨幣の量』である。要するに、マルクスはこの「Ⅲ」で、『monied Capital』という独自の資本が、一方で『現実資本』と、他方で『貨幣量』とどのような関連をもっているか、ということの問題としているのである。ここでの最も基本的なタームが『monied Capital』という資本であることは明らかである」(205ページ)、と。

この整理にかんしても、筆者には特段の異存はない。

ところが、大谷氏と筆者とのあいだでは、マルクスが「比類なく困難な

問題」と呼んだそれに基本的に答えを与えたか否かという肝心な点をめぐって、意見が分かれることになる。

じつは、筆者は、経済理論学会編『季刊経済理論』第54巻第3号（2017年10月）において、『マルクスの利子生み資本論』全4巻の書評を掲載する機会を得た。そのなかで、大谷氏の見解、つまり、「マルクス自身は、エンゲルス版第32章にあたる部分を書き終えたところでも、第2の問題ばかりでなく第1の問題についても、答え切った、これで答え終えた、とは感じていなかったように見える」、「その意味では、この『Ⅲ』あるいはエンゲルス版第30-32章の『貨幣資本と現実資本』では、この問題について最終的な解答を明確なかたちで述べられることはついになかった、と見るべきではなかろうか」、という見解にたいして、筆者の見解、つまり、「論点をこのように整理するならば、『最終的な解答』が与えられたか否かはともかくとして、マルクスは、第1の問題ばかりではなく第2の問題についても、その基本線においては『明確なかたち』で答えをあたえていたことが理解されるであろう」、という見解を対置しておいた。

ただ、書評という限られた字数の範囲内での反論であったので、著者の真意が読者に伝えられたとは言いがたいものであった。

そこで、本稿の目的は、著者の真意をあらためて詳細に説明し直すことに求められる。

2 大谷氏の見解

大谷氏は、『マルクスの利子生み資本論』の第3巻『信用制度下の利子生み資本論(上)』の397-400ページにおいて、以下のように指摘する。

最後に、ここでのマルクスの論述をどの程度まで完成したものとするべきか、などについて一言し、やや長くなったこの解題を終わることにしよ

う。

すでに見たように、冒頭で立てられた問題のうち、monied Capitalと貨幣の量との関連の問題は、この『Ⅲ』の範囲内では本格的に論じられておらず、したがってその答もマルクスによってまとまったかたちで与えられていないと見られるが、いま一つの問題、すなわち monied Capitalの増減と実物資本の蓄積およびその停滞との関連については、この『Ⅲ』のなかでどこまで論じられているのであろうか。この点についても、エンゲルス版〔第32章〕では削除された、問題の再提起があることに注目すべきであろう。

「さて、二つの問題に答えなければならない。第1に、monied Capitalの相対的な増大または減少は、要するにその一時的な、またはもっと継続的な蓄積は、生産的資本の蓄積とどのような関係にあるのか？ そして第2に、それは、なんらかの形態で国内にある貨幣量とはどのような関係にあるのか？」。

問題がここでこのようなかたちで再提起されているということは、マルクス自身は、ここまでのところではこの二つの問題にまだ完全に答え切っていないと、感じていたことを示すものであろう。それでは、この再提起以降のところではどうであろうか。第2の問題について解答が出されていると見るができないことはすでに述べたとおりである。

それでは、第1の問題についてはどうか。このあとの部分では monied Capitalへの需要の変動と商品資本の需要供給の変動との関連について述べられているところと、オウヴァストンへのややまとまった批判を与えている部分とを除くと、議会報告などからの引用があるだけである。monied Capitalへの需要の変動と商品資本の需要供給の変動との関連につ

いて述べているところでも、再提起された問題に答えているような文章はまったく存在しない。マルクス自身は、エンゲルス版第32章にあたる部分を書き終えたところでも、第2の問題ばかりでなく第1の問題についても、答え切った、これで答え終えた、とは感じていなかったように見える。

その意味では、この「Ⅲ）」あるいはエンゲルス版第30-32章の「貨幣資本と現実資本」では、この問題について最終的な解答が明確なかたちで述べられることはついになかった、と見るべきではなかろうか。

このように、自分の提起した最大の問題にさえ総括的なまとめも与えないままに終わっているのだから、この「Ⅲ）」はマルクスにとって、まだまだ不十分なもの、不満足なもの、さらに練り上げなければならないものであったにちがいない。この点から見れば、第3部第5章のかなめである「Ⅲ）」の論述の完成度は低い、その意味で第3部第5章は未完成のまま終わっている、ということができよう。

以上である。

文章中に、「第2の問題について解答が出されていると見る事ができないことはすでに述べたとおりである」、と記されているが、これは、297ページおよび302ページに見出される以下の指摘を指すものであろう。

実際にはこの「Ⅲ）」で「貨幣の量」について触れている個所はわずかである。つまり、マルクスは冒頭で、monied Capitalと貨幣量との関連について問題を立てながら、それについては立ち入って論じることをしなかったように見える。

エンゲルスが彼の第30-32章に、「貨幣資本と現実資本」という、冒頭の二つの問題のうちの前者、すなわち monied Capitalと現実資本との関連にかかわるタイトルをつけたのは、こうした「Ⅲ）」の実際の内容に即したものであった。

このように、「Ⅲ」では、マルクスは monied Capital と貨幣の量との関連を問う問題提起を行ないながら、実際にはこの問題そのものに本格的に取り組むことはなかったように見える。

3 大谷氏の著書にたいする筆者の批判

さきの書評において、筆者は、このような大谷氏の見解にたいして、次のような批判を行なった。

しかし、評者として、著者による以下の断定にかんしては、異存を唱えないわけにはいかない。すなわち、「マルクス自身は、エンゲルス版第32章にあたる部分を書き終えたところでも第2の問題ばかりでなく第1の問題についても、答え切った、これで答え終えた、とは感じていなかったように見える。／その意味では、この「Ⅲ」あるいはエンゲルス版第30-32章の『貨幣資本と現実資本』では、この問題について最終的な解答が明確なかたちで述べられることはついになかった、と見るべきではなからうか」、と。

ところが、エンゲルス版第31章の冒頭の部分において、マルクス自身、「ここでの問題はそもそも、……どの程度まで貸付可能な monied Capital の形態での資本の蓄積が、現実の蓄積と同時に生じうるのか、ということである」、として、以下のように記述する。

「monied Capital (すなわち貸付可能な monied Capital) への貨幣の転化は、生産的資本への貨幣の転化よりもはるかに簡単な事柄……である。しかし、ここでは二つのことが区別されなければならない。――

- (1) たんなる、monied Capital への貨幣の転化。
- (2) monied Capital に転化される貨幣への、資本または収入の転化。

生産的資本の現実の蓄積と関連するような積極的な monied Capital の蓄積を含むことができるのは、ただ後者の点だけである。……すでに見たように、生産的な蓄積とはただ相対的にしか関連しないような、すなわちそれと反比例しているような、monied Capital の蓄積（過多〔superabundance〕）が生じることがありうる。それは産業循環の二つの局面のことである。すなわち、生産的資本が収縮している局面（恐慌のあとの循環の発端）、そして続いて、好転は始まってはいるがまだ商業信用が貨幣信用〔monied credit〕をほとんど促進していない局面である」。

「他方、すでに見たように、monied Capital の蓄積は、現実の蓄積にはまったくかわりなく、たんなる銀行制度の拡張や通貨準備〔currency Reserve〕の節約によって、あるいはまた、私人たちの支払手段の準備ファンドの節約によっても行なわれうる」。

また、この記述のしばらくあとでは、「だがそれにもかかわらず、この monied Capital の量は通貨（Circulation）の量とは異なるものであり、またそれから独立したものである」、として、以下のように続ける。

「たとえば、20ポンド・スターリングが1日に5回貸し付けられるとすれば、100ポンド・スターリングの monied Capital が貸し付けられたわけであり、このことはまた同時に、この20ポンド・スターリングがさらに少なくとも4回は……購買手段または支払手段として機能したということを含んでいるはずである」。

「信用システムが発展している諸国では、monied Capital は、すなわち貸付として自由に使用できる monied Capital は、すべて銀行業者や貨幣貸付業者〔money lenders〕のもとに預金の形態で存在するも

のと想定することができる。{ついでに、……付言しておく。本来の投機が始まる前の繁栄期には、信用が容易である、すなわち信頼は堅実である。そのようなときには、信用の移転が、銀行券の介入なしに通貨〔circulation〕の機能の大部分を果たすのである。} 通貨〔circulation〕{地金および鋳貨を含めて}の量が相対的に少ないのに預金が大いといふことの可能性だけであれば、それはまったく次のことにかかっている。(1) 同じ貨幣片によって行なわれる購買や支払いの度数。(2) 同じ貨幣片が預金として銀行に帰ってくる度数。

しかも、monied Capitalと現実資本との関係を論じた部分と monied Capitalと貨幣量との関係を論じた部分とのあいだには、次のような文章が挿入されている。

「貸付可能な資本〔loanable capital〕は通貨〔Circulation〕の量とはまったく異なるものであること {この量の一部分は、銀行業者の準備であり、この準備は変動している。ここで通貨〔Circulation〕の量と言うのは、すべての銀行券と地金のことである}、等々」。

論点をこのように整理するならば、「最終的な解答」が与えられたか否かはともかくとして、マルクスは、第1の問題ばかりではなく第2の問題についても、その基本線においては「明確なかたち」で答えを与えていたことが理解されるであろう。評者はそのように考える。

4 小林賢齊氏の著書にたいする筆者の書評

じつは、筆者には、マルクスの言う「比類なく困難な問題」に関連した、もう一つの書評を執筆した経緯がある。

政治経済学・経済史学会編『歴史と経済』第216号（2012年6月）に掲載された、小林賢齊著『マルクス「信用論」の解明—その成立史的視座から—』（八朔社、2010年）にたいする書評がそれである。

以下は、この書評の再録である。

本書は、K. マルクスの手稿「信用。架空資本」（エンゲルス版『資本論』第3部第25-35章に相当するマルクスの草稿）を読み解くために、およそ15年間にわたって著書が書き綴ってきた論稿を一書に取りまとめた、マルクス「信用論」の成立史的視座の解明をめぐる、渾身の大作である。収録された論文は14編に達し、ボリュームは500頁を優に超える。

手稿によれば、第27章において、「以下の諸章」の「叙述プラン」を、マルクスは、「われわれは今や利子生み資本そのものが受け取る形態のような、信用制度によるそれ〔利子生み資本〕への影響の考察へと移る」としていたが、エンゲルスは、これを、「以下の諸章では、利子生み資本そのものとの関連で信用を、即ち、その〔信用の〕これ〔利子生み資本〕への影響、並びに、それ〔信用〕がこの場合に受け取る形態を考察する」というように書き改めた。したがって、エンゲルスの解釈では、以下では、利子生み資本そのものではなく、それとの関連で信用ないし信用制度を考察するということになるであろう。これにたいして、マルクスによれば、「利子生み資本との関連で」の信用ないし信用制度の考察にではなく、信用＝銀行制度の下での利子生み資本そのものについての考察に移っていくということになる。

マルクスによって与えられたこの課題に、著者は、成立史的視座に立ち、二つの視点からアプローチする。その一つは、「信用。架空資本」論で取り扱われている資料、材料の「源流」を捉えるという視点からのそれであり、いま一つは、『資本論』第Ⅱ部の「再生産論」と第Ⅲ部の「信用

論」との内的連携を探るという視点である。

「再生産論」の研究から「信用論」の研究へと著者を進ませる契機となったものが、1861-1863年執筆のマルクスの手稿『経済学批判』（いわゆる『23冊ノート』）に含まれる、「エピソード、資本主義的再生産における貨幣の還流運動」であった。社会的総資本の再生産過程を分析する「再生産論」を諸資本の再生産＝循環と、それによって措定される諸所得の流通との、絡み合い連れ合い条件付け合った運動の分析として、したがって、年総生産物の「価値＝素材補填」とそれを媒介する「貨幣流通＝還流」の両側面の統一としての「再生産＝循環論」として捉えるならば、「再生産論」と「信用論」とは、「貨幣流通＝還流」論を介して内的に連携することになる。しかも、この「エピソード」でマルクス自身が指摘しているように、「本来的な貨幣貸付信用」によって媒介された「貨幣流通＝還流」（「信用還流」）も、結局は、現実資本の再生産過程における「現実的還流」（「真の関係」）から自由ではありえないわけである。

こうして、本書は、「エピソード、資本主義的再生産における貨幣の還流運動」についての「解題」をその「序章」とし、第1部『『エコノミスト』誌とJ. ウイルソン』並びに第2部「下院『銀行特別委員会（1857年）』の証言から」において、「信用。架空資本」の資料、材料の「源流」を尋ねた後に、第3部として「信用。架空資本」そのものの考察がなされるという構成をとることになった。なお、そこでは、上述の「叙述プラン」に示されているように、「利子生み資本そのもの」が考察されるのではあるが、それは結局のところ、「信用という事柄全体で唯一困難な問題」——貨幣貸付資本（monied capital）の蓄積と現実資本の蓄積との関係、および、貨幣貸付資本の増減と貨幣量との関係——の考察として、展開されていく。そして、その考察をつうじて、同時に、当時の「新版」貨幣数量説である「通貨理論」、とりわけ、オーヴァーストーンの「貨幣理論」、ならば

に、それに準拠した1844年ピール銀行法の徹底的批判が行われる。

それでは、この「唯一困難な問題」にたいして、マルクスは、はたして答えを与えたのであろうか。

この点についての著者の見解は、以下のとおりである。「『2つの問題』の『第1の問題』の結論は、貨幣貸付資本の蓄積と現実資本の蓄積とは『同一』ではない。唯一例外的に両者が『同時に生じる』のは、『過度緊張の状態に先立つ』『繁栄』の時期であるというものであり、『第2の問題』の結論は、貨幣貸付資本の増減は国内にある貨幣の量からは独立している。そしてこの問題の系論として……、その唯一の例外は、『技術的要因』による通貨の増減と利子率との関係、並びに逼迫期における貨幣退蔵による通貨の不足と利子率の高騰であり、逼迫期以外には通貨の絶対量は利子率に作用しないというものであった。——したがって『事業の状態に関係』なく『技術的關係』によって『現実に流通している』イングランド銀行券に不足が生じる場合、また、『事業の拡大』によって『現実に流通している部分』が不足する場合には、イングランド銀行がそれを供給し〔なければならないという諸結論〕、そして逼迫期にはイングランド銀行が引き締めを強化すればパニックを激化し、銀行券供給によってそれを和らげるという諸結論は、現代においてもほぼそのまま妥当するであろう」(528-529頁)。

こうした著者の見解は、マルクス自身による次のような記述に依拠したものである。すなわち、「唯一困難な問題」の「第1の問題」についての結論——「何よりもまず、貨幣貸付資本〔貸付可能資本〕(*das moneyed Capital* [*loanable Capital*])のどんな蓄積ないし増加も、資本の現実的蓄積ないしは再生産過程の拡大を示して (*indicate*) はいないということは明らかである」(*MEGA*, S. 532)。「唯一困難な問題」の「第2の問題」についての結論——「この貨幣貸付資本の量 (*Masse*) は通貨の量 (*Masse der*

Circulation)とは異なり、また〔それから〕独立している」(S. 556)。「唯一困難な問題」の「第2の問題」についての岐論、すなわち、「貨幣の量」と利子率(貨幣貸付資本の増減)との関係——「だから利子率は通貨の量に依存しない」(S. 598)。この岐論にたいする系論——年総生産物の転態には一定量の貨幣が必要であるが、この必要貨幣は、「資本家階級」ないし「資本家階級全体」の「前貸し」によって供給される。ところが、発達した信用=銀行制度の下では、再生産資本家によるこの「貨幣の前貸し」が銀行業者から借り入れられた貨幣の前貸しとして現れる。このような事情を背景に、逼迫期における貨幣退蔵にもとづく「通貨の収縮」が生じることになる。だから、「通貨の絶対量 (die absolute Quantität) が、逼迫の時期にのみ、規定的に利子率に崩れかかる (zusammenfallen)。この場合、豊富な通貨 (circulation) を求める需要は、ここでは信用収縮 (*discredits*) のゆえの、……貨幣退蔵 (*hording*) のための需要にすぎない」(S. 601)、「それ〔逼迫期〕以外は、通貨の絶対量 (die absolute Masse) は利子率に作用を及ぼさない (*wirken nicht auf*)」(*ibid.*)。

以上が、本書の基本的な内容である。紙数の関係で、ここでは、ひとつだけ、問題を提起することにしたい。

それは、大谷禎之介氏が提起した疑問にかかわる。氏は、「『貨幣資本と現実資本』(『資本論』第3部第30-32章の草稿について)——第3部第1稿の第5章から——」(『経済志林』第64巻第4号、1977年)のなかで、次のように指摘する。「マルクス自身は、エンゲルス版第32章にあたる部分を書き終えたところでも、第2の問題にばかりでなく第1の問題についても、答え終えた、答え切った、とは考えていなかったのではなからうか」(131頁)、「マルクスは、第3部第1稿を中断して、第2部第1稿を書いたが、彼はここで、解明すべききわめて多くの問題を自覚しながら、それを解くところまではいかないまま、ふたたび第3部の執筆に戻ったのではないで

あろうか。それは、〔第2部〕第1稿の三つの部分、すなわち『資本の循環』、『資本の回転』、『流通と再生産』のいずれについても言えることである。マルクスは、『資本論』第1部を刊行したのちも第2部の全体を書き直す努力を続け、第8稿にいたるまでの膨大な草稿を書き続けたのである。第3部第1稿の第5章は、これらの仕事のまえに終えられたものであり、その成果を反映していない(131-132頁)、「だから、第3部第1稿の第5章の到達点と限界を知るためには、どうしても、第2部第1稿以後に、マルクスがそれ以降の第2部草稿のなかでどのような問題をどのように解決したか、ということを確認する必要がある」(132頁)。ちなみに、伊藤武氏もまた、『マルクス再生産論と信用論』(大月書店、2006年)のなかで、大谷氏と同様の観点から、マルクスは第1の問題に「答えきっていないと考えざるをえない」(221頁)、と論定している。

つまり、こういうことである。著者のいわゆる「『資本論』第Ⅱ部の『再生産論』と第Ⅲ部の『信用論』との内的連携を探るという視点からのアプローチ」は、じつは、『23冊ノート』に含まれる「エピソード、資本主義的生産における貨幣の還流運動」という側面に限られていた。しかし、マルクスは第1の問題にも第2の問題にも答えていたという著者の主張を補強するためには、大谷氏が言うように、第2部第1稿以後に、マルクスがそれ以降の第2部第8稿までのなかでどのような問題をどのように解決したか、ということを確認したうえで、第3部第1稿第5章の到達点と限界を明示することが、著者自身にとっても必要とされる作業なのではなかろうか。別の表現をするならば、この視覚からの著者による大谷氏や伊藤氏への積極的な反論を期待せずにはおられないというのが、評者の立場である。

以上である。

いま、この書評を読み直してみると、二つの点で不備があることに気づかされる。

その第1は、「比類なく困難な問題」の二つの問題にたいしてマルクスは答えを与えていたというのが筆者の立場である。その意味で、小林氏の見解と大谷氏の見解を比較した場合に、筆者はあきらかに小林氏の見解に組みしていた。しかし、文面からは読者はこの点をかならずしも明確に汲み取れなかったかもしれない。

その第2は、442-443頁に見出される小林氏による大谷氏にたいする次のような批判を紹介できなかったことである。すなわち、『『マルクスは〔Ⅲ〕』の冒頭で貨幣資本 (monied capital) と貨幣量との関連についての問題を立てながら、それについて未解答のままこの「Ⅲ」を終えているのである。』『冒頭で立てられた問題のうち、貨幣資本 (monied capital) と貨幣の量との関連の問題は、この「Ⅲ」の範囲内では本格的に論じられておらず、したがってもちろんその答も与えられていない』(大谷禎之介『『貨幣資本と現実資本』(『資本論』第3部第30-32章)の草稿について』『経済志林』第64巻第4号、1997年、106、130頁)。氏はその点を、『『信用制度下の流通手段』および『通貨原理と銀行法』(『資本論』第3部第33章および第34章)の草稿について』においても強調されている(『経済志林』第67巻第2号、76頁、他)、と。これは、たんなる紹介文のようにみえるが、じつは、内容的には批判文なのである。ただ、大谷氏は、「マルクス自身は、エンゲルス版第32章にあたる部分を書き終えたところでも、第2の問題ばかりでなく第1の問題についても、答え終えた、答え切った、とは考えていなかったのではなかろうか」、としているのにたいして、小林氏は、なぜか、第2の問題に答え切っていないという大谷氏の文章だけを引用するにとどまっている。

5 貨幣資本と現実資本との関連という第1の問題をめぐって

貨幣資本と現実資本との関連という第1の問題をめぐっては、大谷氏にたいする書評のなかで、マルクスによる以下の記述を紹介した。

「すでに見たように、生産的な蓄積とは相対的にしか関連しないような、すなわちそれと反比例しているような、monied Capitalの蓄積(過多〔superabundance〕)が生じうることがある。それは産業循環の二つの局面のことである。すなわち、生産的資本が収縮している局面(恐慌のあとの循環の発端)、そして続いて、好転は始まってはいるがまだ商業信用が貨幣信用〔monied credit〕をほとんど促進していない局面である」。

これは、エンゲルス版第31章に登場する。

ここで、「すでに見たように」とあるが、それは、エンゲルス版『資本論』第3部第30章に登場する次のような記述を指すのであろう。

「まず明らかなのは、monied Capital {貸付可能な資本〔loanable Capital〕}の蓄積あるいは増加のどれもが、現実の資本蓄積あるいは再生産過程の拡大を示すわけではない、ということである。再生産過程の攪乱はいずれも{恐慌の崩落〔clash〕が過ぎ去れば}、monied Capitalへの需要を減少させ、かくしてそれを相対的に過剰〔redundant〕にするだけでなく、同時にその供給を、したがってまたその絶対量を増大させる。だからこそ、再生産過程が縮小した……どの恐慌のあとにも、商品の価格はその最も低い点まで下がっており、企業精神は麻痺してしまっていて、利子率の水準が低いのであるが、利子率

この低い水準がここで示しているものは、生産的資本の収縮と麻痺とによる monied Capital の増加にほかならないのである。商品価格が下がり取引量が減り労賃に投じられる資本が小さくなるにつれて、流通手段の必要が少なくなるということ、他方では、対外債務が一部は地金流出により一部は破産によって清算されてしまえば、『世界貨幣』としての貨幣は必要ではないということ、そして、手形割引(等々)がこの手形そのものの枚数および大きさの減少につれて減るということとは自明である。つまり、流通手段としてであろうと、支払手段としてであろうと、『新たに』投下される資本の形態としてであろうと、monied Capital への需要は減少し、したがってまたそれが相対的に過剰〔redundant〕になること、これは自明である。しかし、このような事情のもとでは、monied Capital の供給も確実に増加する」。

「貸付可能な moneyed capital —— 有利な投下を求めている遊休している monied Capital —— の量が最大になるのは恐慌のあとであって、再生産過程が縮小し、したがってまた再生産資本の量が一部分減少し(それが商品在庫の量であるかぎりで)、また固定資本の一部は完全には充用されていない、等々のときである。ふだんは商業的割引に向けられている貨幣がもろもろの貨幣センターに溜まっている」。

そればかりではない。貨幣資本と現実資本との関連という第1の問題をめぐって、同じエンゲルス版第30章には、決定的ともみなされうるマルクスによる次の二つの記述が登場する。

「再生産過程がふたたびその繁栄の状態(これは過度緊張の状態に先行する)に達したならば、商業信用は非常に大きくなるのであるが、その場合にはこの信用には、実際にこれまた、順調な還流と拡大され

た生産という『健全な』土台がある。この状態では、利子率は、その最低限度よりは高くなるとはいえ、やはりまだ低い。じっさい、この時期こそは、低い利子率、したがってまた貸付可能な資本〔loanable Capital〕の相対的な豊富さが生産的資本の現実の拡張と同時に生じると言いうる唯一の時点である。大きな商業信用と結びついた還流の順調さは、貸付可能な資本〔loanable Capital〕の供給を、それへの需要の増大にもかかわらず、確実にして、それをその水準に維持する」。

ここには、「貸付可能な資本〔loanable Capital〕の相対的豊富さが生産的資本の現実の拡張と同時に生じると言いうる唯一の時点である」という表現が使用されている。

この記述にすぐつづいて、次の記述が出現する。

「つまり全体として見れば、monied Capitalの運動（利子率に表現されるそれ）は生産的資本の運動とは逆なのである。利子率はその平均的な高さに、すなわちその最低限度からも最高限度からも同じ距離にある中位点に達することが、豊富な貸付可能な資本〔loanable capital〕と生産的資本の大膨張とが同時に生じていることを表現する。『好転』および『信頼の増大』と同時に生じる、低いとはいえ最低限度よりも高い利子率も同じことを表現する。しかし、産業循環の発端では、低い利子率が生産的資本の収縮と同時に生じ、終わりには高い利子率が生産的資本の過多〔superabundance〕と同時に生じる。『好転』に伴う低い利子率は商業信用がわずかな度合いでしか貨幣信用〔moneyed Credit〕を必要とせず、まだ自立していることを表現している」。

ここには、「全体として見れば、monied Capital の運動（利子率に表現されるそれ）は生産的資本の運動とは逆なのである」という表現が使用されている。

筆者には、これらの記述を確認するだけでも、貨幣資本と現実資本との関連という第1の問題にたいして、マルクスが明確な答えを与えていたものと判断してなんの差しつかえもないように思われる。

また、これらの記述とは別に、銀行業者の「財産の蓄積」と「現実の蓄積」との関係に言及した、エンゲルス版第30章に見出される、マルクスによる、次の指摘も存在する。

「貨幣資本の蓄積を——当面の考察から除いておくために述べるだけであるが——私的な貸し手であろうと公的な借り手（国家）や再生産的な借り手であろうと、彼らの媒介者〔Vermittler〕としての銀行業者（職業的な貨幣貸付業者〔moneylender〕）の手中にある富の蓄積のことだと解することができるであろう。というのも、信用システムの膨大な拡張の全体が——総じて信用が——彼らによって彼らの私的資本として利用しつくされるのだからである。この連中はいつでもその資本と収入とを、貨幣形態で、又は貨幣にたいするもろもろの直接的請求権のかたちでもっている。この階級の財産の蓄積は、それが現実の蓄積とともにきわめてさまざまな方向を取りうるにせよ、いずれにしても、彼らが現実の蓄積のかなりの部分を取り込んでしまうことを証明しているのである」。

貨幣資本と現実資本との関連という第1の問題を考える際には、「貨幣資本の蓄積を私的な貸し手であろうと公的な借り手（国家）や再生産な借り手であろうと、彼らの媒介者〔Vermittler〕としての銀行業者（職業的な

貨幣貸付業者〔moneylender〕の手中にある富の蓄積だと解することができる」こと、「この階級の財産の蓄積は、それが現実の蓄積とともにきわめてさまざまな方向を取りうるにせよ、いずれにしても、彼らが現実の蓄積のかかなりの部分を取り込んでしまうこと」、こうした側面も見落とすことができないであろう。

さて、ここまでは、貨幣資本と現実資本との直接的な関連に言及したマルクスの指摘に注意を集中してきた。

ところが、大谷氏にたいする書評のなかで引用したように、マルクスには、次の説明も残されている。

「他方、すでに見たように、monied Capitalの蓄積は、現実の蓄積にはまったくかわりなく、たんなる銀行制度の拡張や通貨準備〔currency Reserve〕の節約によって、あるいはまた、私人たちの支払手段の準備ファンドによっても行なわれうる」。

ここでも、「すでに見たように」とあるが、それは、エンゲルス版第30章に登場する次の記述を指すものと考えられる。

「monied Capitalの膨張は、銀行制度が普及したために（たとえば、イプスウィッチの例を見れば、そこでは1857年までのわずか数年に、借地農業者のもとでの預金が4倍にもなった）、つまり以前は私的蓄蔵貨幣であったもの、あるいはまたたんなる鑄貨準備でもあったものが、一定の期間を限っていつでも貸付可能な資本〔loanable Capital〕に転化する、ということからも生じるのであるが、monied Capitalのこのような膨張を、生産的資本のなんらかの増大を表現するものだと言うことはできない（それは、預金に利子をつけるようになったために生じたロンドンの

株式諸銀行での預金の増大〔をそう言うことができないの〕と同様である)。それはただ、生産的資本に比べての貸付可能な monied Capital の過多〔superabundance〕をもたらすだけである。だからこそ、利子率が低いのである」。

この点にかんしては、同じくエンゲルス版第30章に登場する、次の記述もあわせて留意されなければならない。

「たんなる節約が最高の形態で現れるのは、手形交換所において、すなわち、手形のたんなる交換において、言い換えれば支払手段としての貨幣の機能の優勢においてである。しかし、これらの手形の存在は、生産者や商人等々が互いのあいだで与え合う信用にもとづいている。この信用が減少すれば、手形（ことに長期手形）の数が減少し、したがって振替というこの方法の効果もまた減少する。そして、この節約はもろもろの取引で貨幣を取り除くこと〔suppression〕にもとづいており、完全に支払手段としての貨幣の機能にもとづいており、この機能はこれまた信用にもとづいている {これらの支払いの集中等々における技術の高低度は別として} のであるが、この節約にはただ二つの種類だけがありうる。すなわち、手形または小切手によって代表される相互的債権が同じ銀行業者のもとで相殺されて、この銀行業者がただ一方の人の勘定から他方の人の勘定に債権を書き換えるだけであるか、または、銀行業者どうしのあいだで相殺が行なわれるかである」。

ここでは、銀行業者による手形交換所をつうじた自身の支払準備ファンドの節約としたがってそれにとまなう貨幣資本の蓄積が論じられている。

つまり、マルクスによれば、「現実の蓄積」にはまったくかわりのない「monied Capitalの蓄積」がありうるというわけである。そして、ここから、貨幣資本と現実資本とのこうしたいわば間接的な関連もまた、マルクスにより、広義の意味において、貨幣資本と現実資本との関連という第1の問題に含めて考えることができるとして、そこであわせて検討されることになったという次第である。

ちなみに、「現実の蓄積」にはまったくかわりのない（あるいは直接には関係しない）「monied Capitalの蓄積」といってもその内容はさまざまでありうる。

マルクスは、エンゲルス版第32章の冒頭において、「これまでに説明した最も重要」なものとして、「収入のうち消費に向けられている部分の膨張」という要因を取り上げる。

「これまでに説明したことで最も重要なのは、収入のうち消費に向けられている部分の膨張〔この場合労働者は度外視する、なぜなら労働者の収入は可変資本にイコールだからである〕は貨幣資本の蓄積として現われるということである。つまり、貨幣資本の蓄積には、生産的資本の蓄積とは本質的に違った一つの契機がはいるのである。というのも、年間生産物のうちで消費に向けられる部分はけっして資本にならないのだからである。（そのうちの一部分は、資本を、すなわち生活手段の生産者たちの不変資本を補填するが、その部分が現実に資本に転化するかぎりでは、それは不変資本の生産者の収入の現物形態で存在する。）収入を表わして、たんなる、消費手段として役立つその同じ貨幣が、絶えず、貸付可能な『monied capital』に転化するのである。この貨幣が労賃を表わしているかぎりでは、それは同時に可変資本の貨幣形態であり、また、それが生活手段の生産者の不変資本を補填するかぎ

りでは、それは彼らの不変資本の貨幣形態であって、補填されるべき彼らの不変資本の移転〔transfer〕に役立つ。しかし、この二つのどちらの形態にあっても、この貨幣は、たとえその量は再生産過程の規模につれて増大するにしても、それ自体としては蓄積を表わしてはいない。しかし、それが同時に、一時的には、貸付可能な『monied capital』の機能を、すなわち貸付可能な〔ausleihbar〕貨幣としての機能を遂行するのである。だから、この面から見れば、monied Capitalの蓄積は、つねに、現実に存在するよりも大きな資本蓄積を表現せざるをえないのである。というのは、個人的消費過程は、その媒介と拡大とにおいて、monied Capitalの蓄積として現われるから、つまり、現実の蓄積のために、新たな資本投下を開始する貨幣のために、貨幣形態を提供するからである」。

それでは、「これまでに説明したことで最も重要な」ものとされる、「収入のうち消費に向けられている部分の膨張」という要因は、「これまで」のどこにおいて説明されていたのであろうか。おそらく、それは、エンゲルス版第31章の最後のパラグラフに含まれる、次の記述を指しているものと考えられる。

「収入として支出されるべき部分はだんだんと消費されていくが、そのあいだは預金として銀行業者のもとで moneyed Capitalを形成する。だから、利潤のうち収入として支出される部分の増大でさえも、一時的な、しかし絶えず繰り返される、monied Capitalの蓄積として表現されるのである。〔利潤のうちの〕もう一つの、蓄積に向けられている部分も同様である。だから、信用制度とその組織との発展につれて、収入の（再生産的資本家たちの消費の）増大でさえも、monied

Capitalの蓄積として表現されるのである。そして、このことは、収入がだんだんと消費されていくかぎりでは、すべての収入にあてはまる。つまり地代、比較的高級な形態の労賃、不生産的諸階級の収入、等々にもあてはまる。{生産的資本家を度外視すれば、すべての収入が一時、貨幣収入の形態をとるのであり、したがってまた預金に、だからまた moneyed Capital に転化することができるのである}」。

なお、エンゲルス版第30章のなかには、次の記述も存在する。

「労賃の支払いで機能する、総じて収入の支出 {それはいまイングランドでは、約5000万ポンド・スターリングとなっている} で機能する貨幣の大きな部分でさえ、貸付可能な資本 [loanable capital] に転化する」。

話を元に戻すならば、さきほどの「収入のうち消費に向けられている部分の膨張」にかんする引用個所につづいて、マルクスは、「利潤のもう一つの部分、すなわち収入として消費されるものとして予定されていない部分」の「moneyed Capital への転化」という要因を取り上げる。

「ところで、利潤のもう一つの部分、すなわち収入として消費されるものとして予定されていない部分について言えば、それが moneyed Capital に転化するのは、ただ、それが直接に、それを生み出した生産部面での事業の拡張に充用されない場合だけである。このようなことは二つの原因から生じうる。一つの原因は、この部面が必要な資本で飽和状態にある [saturated] ということである。もう一つの原因は、資本として機能できるようになる前に、蓄積がまずもっ

て、この特定の事業での新たな資本の充用の量的関係に規定された或る大きさに達していなければならないということである。だから、蓄積はさしあたりまず moneyed Capital に転化して、他の諸部面での生産の拡張に役立つのである」。

ちなみに、この二つの引用個所のあいだには、「原料やその他の生産要素の価格の下落」、「たとえば商人の場合の取引の流れの中断」、「一財産をつくって再生産から引退する連中」による「貨幣資本の蓄積」という要因についての、以下の説明が挿入されている。

「{資本(使命から見て)への収入の再転化とはさらに区別されるべき、貨幣資本の蓄積の二つの形態。たとえば、原料やその他の生産要素の価格の下落によって資本が『遊離させ(liberate)]られる。資本家が直接に、自分の再生産過程を拡張することができなければ、彼の貨幣資本の一部分は循環のなかでのその機能から遊離して、貸付可能な monied capital に転化する。第2に、たとえば商人の場合には、金または銀での還流は彼にとって最悪の種類のものであって、というのも、彼は商品の還流の場合にはさらに商品の価格に加えられた利潤をあげることができるのであって、第1に最初の商品の販売のところで、つぎには帰り荷商品〔Returnware〕の販売のところでそうできるのだが、他方金または銀は、国内貨幣の材料となっている商品であって、いつでもただその価値を実現するだけであり、ただ、一定分量(それ自身の価値の大きさによって規定されている分量)の国内貨幣に転化できるだけだからである。ところで、中断が生じ、そのために新しい取引をもっとあとでなければ始められないとすれば、貨幣は彼にとっては蓄蔵貨幣を表わし、遊休資本を表わしているだけである。し

かし、同時にそれは直接に貸付可能な『monied Capital』の蓄積を表現している。一方の場合には、monied Capitalのこの蓄積が表現しているのは、より有利な条件のもとでの再生産過程の反復であり、それ以前は拘束されていた資本の一部が現実には遊離することであり、つまり、同じ資金〔Geldmittel〕での再生産過程の拡張の力〔Power〕である。他方の場合には、〔それは〕たんなる取引の流れの中断〔を表現している〕。しかしどちらの形態にあっても、その貨幣はmonied Capitalに転化し、この資本の蓄積を表現し、等しく貨幣市場、利率に影響を与える。といっても、現実の蓄積過程へのその関係は対立的な性質のものなのであるが。最後に、monied Capitalの蓄積は、一財産をつくって再生産から引退する連中の量によって規定される。産業循環のなかでの利潤が多ければ多いほど、これらの『引退する〔retiring〕』青物商〔greengrocer〕の数はそれだけ大きくなる。それゆえ、monied Capitalのこうした蓄積が表現するものは、一方では現実の蓄積であり（その相対的な大きさから見れば）、他方ではつねにただ再生産資本家が貨幣資本家〔monied capitalist〕に転化する範囲だけである}」。

さきの二つの引用箇所の内容がいわば本論の一部を成すのにたいして、ここで例示された要因はいわばエピソード的部分を成すものとも考えることもできるであろう。もっとも、本稿の第8節でマルクスによる「資本のプレトラ」論を検討することになるが、マルクスは、「資本のプレトラ」論の展開にあたり、このパラグラフに重要な役割を付与することになる。

エピソード的要因ということになれば、マルクスによって、これ以外にも次のような要因が列挙されている。

「たとえば当時問題となっていた鉄道を見ても、軌条のために金や紙幣が消費されるわけではなく、また鉄道株に投じられた貨幣は、それがたんに払込請求に備えて預託されたかぎりでは、銀行業者に預託された他のすべての貨幣と同じように機能した {それどころか、のちに述べるように moneyed Capital を増やした} のであり、現実には建設に支出された貨幣は国内で購買手段および支払手段として流通した」、「鉄道等々のような公共事業が一時的に貸付可能な資本 [loanable capital] を増加させることもありうる (『払込請求』の結果生じた預金がまだそれらの固有の目的に使われていない中間期間に) ことはすでに見た」。

前者の記述はエンゲルス版第30章に、後者の記述は第31章に登場する。

「moneyed Capital の蓄積は、たとえば1852年と1853年に、オーストラリアとカリフォルニアの〔金鉱の〕発見の結果として生じたような、異常な地金流入によって〔生じる〕こともありうる。〔それらは〕イングランド銀行に預金された。……そのために異常な通貨 [Circulation] 〔量が生じた〕。イングランド銀行は、割引率を2%に下げることによって、この保管物 [deposits] を価値増殖させようとした」。

この記述はエンゲルス版第31章に登場する。

さて、論点をこのように整理するならば、筆者には、マルクスは、貨幣資本と現実資本との関連という第1の問題について、「最終的な解答」を与えたか否かはともかくとして、基本線においては「明確なかたち」で「解答」を与えていたように思われるのであるが、いかがなものであろうか。

6 貨幣資本と貨幣量との関連という第2の問題をめぐって

大谷氏にたいする書評のなかで、筆者は、マルクスの記述を引用しつつ、この第2の問題についても、マルクスが基本線においては「明確な私たち」で「解答」を与えていたことを強調した。何と云っても、「貸付可能な資本〔loanable capital〕の大きさは通貨〔Circulation〕の量とは異なるものである」、「この monied Capital の量は通貨〔Circulation〕の量とは異なるものであり、またそれから独立したものである」、というマルクスの断言には重みがある。これらの表現が有する含意が深くかみしめられるべきであろう。

しかし、ここでは、エンゲルス版『資本論』第3部第32章の前半に見出される、この問題にかかわりがあるマルクスの別の説明を引用することにしたい。それは、以下のようなものである。

「同じ貨幣片が何度 monied Capital として役立ち〔fungiren〕うるかは、つまり、どれだけの額になるかは、まったく次のことにかかっている。(1) 同じ貨幣片が販売あるいは支払いで何度商品価値を実現するか、また、何度それが収入を実現するか、ということにかかっている。この収入そのものが、商品価値の一部でしかないこともありうるのであって、この部分が労賃に（生産的または生産的に）投下されるのであろうと、あるいは、売り手自身または第三の人物が（貨幣貸付業者〔moneylender〕または地主または国家が代わるがわる）支出しなければならない剰余価値を実現するのであろうと、そうである。だから、それが実現された価値として（資本であれ収入であれ）何度持ち手を取り代えるかは、明らかに、現実の諸取引の規模と量とにかかっているのである。しかし、(2) 諸支払の節約に、信用制度の発展および

組織化〔Organisation〕にかかっている。しかし、(3)信用の連鎖の速さに(したがって、それがあつて預金として沈殿しても、それがすぐまた貸付として出て行くということ、等々に) かかっている}」。

「monied Capital が存在する形態が、ただ、貨幣の(金銀の、すなわち自己の材料が価値の尺度として役立つ商品の) 形態だけだと仮定しても、この monied Capital の大きな部分はずねに必然的にたんに架空なものである。すなわち価値への権限〔Titel〕である(価値章標と同様に)。Aは彼の商品または彼の労働を売り、それと引き換えにGを、貨幣〔money〕を受け取る。この貨幣〔money〕が資本の変態の中で機能しなければならないかぎり、それは monied Capital に転化するのではなく、その所有者によって再生産の諸要素と交換される。それがただちに収入の実現に役立つかぎりでは、それは通貨〔currency〕として支払われてしまうのであり、したがってまた、monied Capital に転化することはできない(少なくともその所持者にとってはできない)。しかし、それが monied Capital に転化して、同じ貨幣片が繰り返し monied Capital を表わすかぎりでは、明らかに、それはただ一つの点で金属貨幣〔metallic money〕として存在するだけであつて、他のすべての点では、それはただ資本の請求権〔claim〕というかたちで存在するだけである」。

「一見したところ〔prima facie〕、moneyed Capital はつねに貨幣〔money〕の形態で存在する。(のちには貨幣への請求権〔claim upon money〕として存在する。というのは、その最初の存在形態である貨幣〔money〕は、貸し付けられれば、いまでは、資本の現実の貨幣形態、貨幣資本〔money Capital〕として機能するのは借り手の手のなかだからである。貸し手にとってはそれは貨幣への請求権〔claim upon money〕に、あるいは所有権限に、転化してしまつてゐる。それゆゑ、同じ量の貨幣〔money〕で

も、非常に違った量の monied Capital を表わすことができるのである。) また、たんなる貨幣〔money〕が、それが実現された資本であろうと実現されと収入であろうと、たんなる貸出の行為によって、預金へのその転化によって〔monied Capital に〕なるのである。]

最後の文章のなかには、「同じ量の貨幣〔money〕でも、非常に違った量の monied Capital を表わすことができるのである」、という断言が含まれている点に留意が必要であろう。

さて、論点をこのように整理するならば、筆者には、マルクスは、貨幣資本と貨幣量との関連という第2の問題についても、「最終的な解答」を与えたか否かはともかくとして、基本線においては「明確なかたち」で「解答」を与えていたように思われるのであるが、いかがなものだろうか。

本節を終えるにあたり、エンゲルス版第34章「信用制度下の流通手段」に見出される、貨幣量と利子率との関連を論じた、以下の発言もあわせて紹介しておくことにしたい。

「流通〔Circulation〕の絶対量が規定的なものとして利子率と一致するのは、ただ逼迫期だけのことである。このような場合、一方では、潤沢な流通〔full circulation〕にたいする需要は、ただ、信用喪失〔Discredit〕のために（流通〔Circulation〕の速度の低下や同じ貨幣が絶えず貸付可能な資本に転換される速度の低下は別として）生じた蓄蔵にたいする需要〔でありうるのであって〕、……。

このような場合のほかは、流通〔Circulation〕の絶対量は利子率には影響しない。というのは、この絶対量は、節約や速度を不変と前提すれば、諸商品の価格と諸取引の量によって規定されており〔たい

ていは一方の契機が他方の契機的作用を麻痺させる}、また信用によって規定されているのであって、逆にそれが信用の状態を規定するのではないからであり、他方では、物価と利子とのあいだにはなにも必然的な関連はないからである」。

7 マルクスは「最終的な解答」を与えなかったとする大谷氏の論拠

大谷氏は、「マルクス自身は、エンゲルス版第32章にあたる部分を書き終えたところでも、第2の問題ばかりではなく第1の問題についても、答え切った、これで答え終えた、とは感じていなかったように見える」、「その意味では、この『Ⅲ』あるいはエンゲルス版第30-32章の『貨幣資本と現実資本』では、この問題について最終的な解答が明確なかたちで述べられることはついになかった、と見るべきではなかろうか」、と主張する。

筆者には、その論拠は以下の2点に集約することができるように思われる。

第1点は、マルクスの叙述の形式にかかわるものである。ここでは、『資本論』第3部第5章草稿の「Ⅲ」と題された個所において、マルクスが3度にわたり、繰り返し、「貨幣資本と現実資本」との関連という問題を提起し直していたという現実が正面に据えられる。

大谷氏は、『マルクスの利子生み資本論』の第3巻『信用制度下の利子生み資本(上)』のなかで、自身の見解を、次のように展開する。

「エンゲルス版の表題にもあるように、この『Ⅲ』のもっとも基本的なタームが『monied capital』と『現実資本』であることに異論がないであろう。念のために、この部分の冒頭で提起されている問題を確認しておこう」(204ページ)。

「ここには二つの問題が提起されていると見られるが、そのうちの第1のものは、エンゲルス版第31章の冒頭のところで、ふたたび、次のように繰り返されている」(同)。

「つまりマルクスは、この前の部分ではこの問題についてまだ解答を述べていないと考えているのである。そしてさらに、エンゲルス版第32章の前から3分の1ほどの個所にあたるところで、マルクスはまたしても、ただし今度は先の二つの問題を、次のようにあらためて提起している。(この部分はエンゲルス版では削除されている。)」(同)。

「ここでもマルクスが、最初に提起した二つの問題にまだ『答え』切っていないと考えていたことがわかる」(205ページ)。

しかし、この大谷氏のこの見解にたいしては、三つの異議を唱えざるをえない。

第1の異議。マルクスの叙述の形式を検討するよりも、マルクスの叙述の内容を検討するべきではなかろうか。そして、マルクスの叙述の内容を検討するならば、すでにみたように、筆者には、マルクスは、貨幣資本と現実資本との関連という第1の問題についても、貨幣資本と貨幣量との関連という第2の問題についても、基本線においては「明確なかたち」で「解答」を与えていたように思われてならない。ただ、マルクスは、まとまった形式で解答を与えているわけではないことも事実である。上記の結論は、マルクスの思考の足跡を丹念にたどり、そこに一貫する論理を読み取ろうとする努力の結果として導き出されたものにすぎない。あるいは、マルクスには提起した問題にまとまった形式で解答を与えていないという意識が心のどこかに残っていて、それが自身による3度にわたる問題提起につながったのではないかとも考えられる。

第2の異議。2回目の問題提起にあたって、マルクスは第1の問題にし

か触れていない。しかし、だからといって、第2の問題がマルクスの念頭から抜け落ちていたわけではないこともあわせて留意されるべきであろう。じっさい、「貸付可能な資本〔loanable capital〕の大きさは通貨〔Circulation〕の量とはまったく異なるものである」、「この monied Capitalの量は通貨〔Circulation〕の量とは異なるものであり、またそれから独立したものである」という断言は、2回目の問題提起の脈絡のなかで登場するものである。

第3の異議。3回目の問題提起の直後に、マルクスがこの問題に答えようとした痕跡が残されていることである。「まず第1に、かなり長い目で見れば、実体的な富の増大につれて、貨幣資本家の階級が増大する。というのは、利子で生活する引退した青物商の数が増加し、第2には、信用システムの発展が〔見られ〕、それとともにまた銀行業者、等々〔が増加する〕からである。〔また金融業者〔financier〕も。だが、われわれは公信用〔public credit〕は度外視する。〕」、というのがそれである。この記述の内容は、われわれにとっては既知のものである。そして、既知のものであることが、逆に、マルクスは、第1の問題についても第2の問題についても、基本線においてはすでに「明確なかたち」で「解答」を与えていたことの傍証になりはしないであろうか。

大谷氏が掲げる論拠の第2点は、第3部草稿と第2部草稿との関係という、より理論的な問題にかかわっている。前掲書第10章「『貨幣資本と現実資本』に使われたマルクス草稿」の「むすびに代えて」の末尾において、氏は、論点を以下のように整理する。

それでは、マルクスにとってさらに研究を深めて明らかにしなければならぬと感じられていた諸問題のなかで、最も重要なものはなんだったのだろうか。

卓見では、マルクスが「5）信用。架空資本」の執筆中に、ここでの諸問題を最終的に解くためにまだ十分に準備ができていないと感じ続けていた事柄のなかで最も大きかったのは、第2部で論じられるべき諸問題であったように思われる。マルクスは、第3部第1稿の執筆を中断して、第2部第1稿を書いたが、彼はここで解明すべききわめて多くの問題を自覚しながら、それどころか、答を出す必要のある新たな諸問題を見いだしながら、それらを解くところまではいかないまま、ふたたび第3部の執筆に戻ったのではないであろうか。それは第1稿の三つの部分、すなわち「資本の循環」、「資本の回転」、「流通と再生産」のいずれについても言えることであろう。マルクスは、『資本論』第1部を刊行したのちも第2部の全体を書き直す努力を続け、第8稿にいたるまでの草稿を書き続けた。第3部第1稿の第5章はこれらの仕事の前に終わられたものであり、もちろん、その成果は反映されていない。現行版（エンゲルス版）の第2部に利用された草稿のそのすべてが第3部第1稿の執筆後に書かれたものなのである。

だから、第3部第1稿の到達点と限界とを知るためには、どうしても、第2部第1稿以後に、さらに第3部第1稿の第5章以後に、それ以降の第2部草稿のなかでマルクスがどのような問題をどのように解決したか、どのような新たな問題をつかみ、またそれを解決したか、ということを正確に把握する必要がある。これを通じて、第3部第1稿執筆時にマルクスがまだ解決しきれていなかった事柄を知り、それが第5章の分析をどのように制約していたのかを見ることによって、「Ⅲ）」の部分で解明しきれずに残された問題をどのように展開すべきかについて、手がかりを得ることができるであろう。そのさいとりわけ、のちの諸草稿でマルクスが循環、回転、再生産の全体を通じて貨幣の問題に苦闘したこと、あるいはもっと積極的に言えば、生産的資本の循環、回転、再生産のいずれにおいても資本が貨幣形態をとらなければならないということの重要性をますますはつき

りと意識するようになっていったことに留意すべきであろう。そのなかには、再生産過程における貨幣の規定性（流通手段および蓄蔵貨幣）の転換の問題、固定資本の償却と更新、蓄積ファンドの積立と投下、可変資本前貸における貨幣還流の独自性とその決定的な重要性などの、のちの諸草稿ではじめて十分に論じられた諸問題があり、のちに彼が明快な解答を得たとみられる、流通手段の前貸と資本の前貸との区別の問題があり、また産業循環との関連では、蓄積率の変動に伴う実物資本の需給の変動が *monied capital* への需要に及ぼす影響の問題などもある。マルクスは1881年に第2部第8稿で『資本論』の執筆を最終的に打ち切るまでに、さまざまな問題と格闘し、思索を継続し、新たな認識を得ていったのだった。だから、第3部第1稿以後の苦闘のなかでマルクスが新たに獲得したもろもろの認識をつかむことができたとき、はじめて、第3部第1稿第5章でのマルクスの分析、とりわけその「5）信用。架空資本」でのマルクスの論述の到達点とその当時の限界とが、したがってまた、論述のうちのどの点をどのように修正し、さらに発展させる必要があるのか、ということが見えてくるはずだ、と思われるのである。

以上である。

この大谷の見解に、伊藤氏も、『マルクス再生産論と信用理論』の第8章「現実資本の蓄積と貨幣資本の蓄積」のなかで、次のように指摘することにより、基本的に追従する。すなわち、「この『資本論』第3部の第1草稿は、第3部の主要草稿ではあるが、未完成の、文字どおりの草稿にはかならず、とりわけ第5章のⅢ）の部分、この第5章を訳出された大谷禎之介氏も述べているように、マルクス自身Ⅲ）の冒頭で提起した問題に答え切っていないと考えざるをえないし、その原因は、第3部第1稿の執筆を中断して書かれた第2部第1稿の『資本の流通過程』が著しく未完成

のものであったと考えざるをえないからである」(221ページ), と。

伊藤氏の見解の大略は、以下のとおりである。

預金の源泉となる蓄蔵貨幣の形成は、信用論に固有の問題ではなく、むしろ再生産過程の問題であり、その分析は『資本論』第2部において論じられるべき問題である。

総じて言えば、マルクスの『資本論』第2部の第1草稿は文字どおりのトルソーであって、ここでは信用制度の基礎となる資本の流過程における蓄蔵貨幣の析出あるいは形成は、執筆過程においてマルクスの念頭にはなかったといってよい。それゆえに、第3部第1草稿での貨幣資本蓄積と現実資本蓄積との関連の分析において、マルクスは、いわば手探りしつつ分析を進めざるをえなかったのであり、最終的に未完成にとどまったのである。

つまり、第2部第2稿および第5稿では、マルクスは信用制度との関連を念頭におきつつ、「資本の流過程」を論じているのであるが、第1稿においては「資本の流過程」論は未完成なトルソーでしかなかったのである。マルクスは、利子率で表わされる利子生み貨幣資本の運動と利潤率で表わされる現実資本の運動とは異なること、そこに利子生み貨幣資本が現実資本から自立した運動を展開することを強烈に認識していた。そこでマルクスは、まず産業循環過程における利子率の変動、それを規定する利子生み貨幣資本の需要と供給を描写し、それを再生産過程にまで下降して解明しようとしたのである。しかし、その土台となる第2部「資本の流過程」論が未完成であったために、利子生み貨幣資本と現実資本の運動との関連の分析は未完成に終わったのである。これが本稿の結論である。

以上である。

ちなみに、両者の見解をこのように整理するならば、大谷氏のそれと伊藤氏のそれとのあいだには差異は存在しないようにみうけられるが、じつは、そこには微妙な差異が存在することにもあわせて留意がはらわれるべきである。伊藤氏の著書の第9章「貨幣と貨幣資本」に目を通すと、氏は、貨幣資本と貨幣量との関連という第2の問題については、マルクスが「解答」を与えていたように判断している形跡がうかがえる。つまり、伊藤氏によれば、マルクスは、貨幣資本と現実資本との関連という問題については「解答」を与えることができなかったが、貨幣資本と貨幣量との関連という第2の問題については「解答」を与えていたということになる。これにたいして、大谷氏の見解は、第2の問題についてはもちろん、第1の問題についてもマルクスは「解答」を与えることができなかったというものであった。いまや、両者の見解の相違の所在は明らかであろう。

さて、大谷氏および伊藤氏の熱弁ぶりに比較して、現時点での筆者による両者への疑問ないし批判はいたってシンプルなものである。筆者にとって気になるのは、第3部第5章の草稿と第2部第1稿の草稿とのあいだのマルクスによる執筆時期の前後関係という問題である。

大谷氏の『マルクスによる利子生み資本論』第2巻『信用制度概説』によれば、第3部第5章と第2部第1稿とのあいだの執筆時期の前後関係は、以下のとおりである。

「『資本論』の第3部は、数か月にわたる中断をはさむ二つの段階で成立した。マルクスはこの中断の時期、つまり1865年の前半のあいだに、第2部の草案〔第2部第1稿のこと——筆者〕と講演『価値、価格、利潤』を書いたのである」(403ページ)。

「第3部のある一部分が——まず間違いなく最初の三つの章が——第2部の執筆の前に書かれたことを示唆している」(404-405ページ)。

「第4章とそれ以降のすべての章が第3部の草案の第2の作業段階で成立した」(405ページ)。

つまり、第3部第5章——当然のことながら、本稿で問題としているそのうちの「Ⅲ」に相当する部分を含めて——の草稿は、第2部第1稿の後で執筆されたというわけである。そうになると、次のような素朴な疑問が浮かび上がることにならざるをえない。

大谷氏の見解によれば、第2部第1稿を執筆したがゆえに、第1の問題についても第2の問題についても、マルクスは「解答」を断念せざるをえなくなったということである。そうだとすれば、「解答」することができないことが最初から当然予想されたはずの「比類なく困難な問題」を、なぜ、マルクスは、第2部第1稿の後で執筆された第3部第5章の「Ⅲ」の部分において、三度にわたって提起する必要があったのであろうか。あるいはその問題について「解答」を与えようとして、あれほどまでの努力を重ねたのであろうか。不可解であると言わなければならない。

やはり、「最終的な解答」が与えられたか否かはともかくとして、マルクスは、第1の問題ばかりではなく第2の問題についても、その基本線においては「明確なかたち」で答えを与えていたと理解するほうがよほど素直であるように思われる。

8 「資本のプレトラ」という問題をめぐって

マルクスは、「Ⅲ」の冒頭の問題提起のなかで、「いわゆる資本のプレトラ（この表現は、つねに *monied Capital* について用いられるものである）、——これは過剰生産と並ぶ一つの特異的な現象をなすものなのか、それとも過剰生産を表現するための一つの特異的な仕方にすぎないのか?」、と書いていた。

はたして、この「資本のプレトラ」という問題についてはどのような「解答」が与えられているのであろうか。エンゲルス版第32章の初めの部分には、この問題に「明快なかたちで」「解答」を与えた二つのパラグラフが、しかも、連続するかたちで登場する。

それは、以下のとおりである。

「ところで、利潤のもう一つの部分、すなわち収入として消費されるものとして予定されていない部分について言えば、それが moneyed Capital に転化するの、ただ、それが直接に、それを生み出した生産部面での事業の拡張に充用されない場合だけである。このようなことは二つの原因から生じる。一つの原因は、この部面が必要な資本で飽和状態にある〔saturated〕ということである。もう一つの原因は、資本として機能できるようになる前に、蓄積がまずもって、この特定の事業での新たな資本の充用の量的関係に規定された或る程度の大きさに達していなければならない、ということである。だから、蓄積はさしあたりまず moneyed Capital に転化して、他の諸部面での生産の拡張に役立つのである。諸事情がすべて変わらないと仮定すれば、資本への再転化に予定される利潤の量は、得られる利潤の量によって、したがってまた、諸事情がすべて変わらないものと前提すれば、現実の再生産過程の拡張によって、左右されるであろう。しかし、もしこの新たな蓄積がその充用にさいして投下部面の不足から生じる困難にぶつかる（したがって、その結果さらに、充用中の再生産的資本が支払う利子が低下することになる）とすれば、このような moneyed Capital のプレトラが証明するものは、資本主義的生産過程の諸制限以外のなものでもない。そのあとにくる信用詐欺は、この剰余資本の充用にたいする積極的な障害がない、ということを証明し

ている。とはいえ、資本の価値増殖の諸法則〔Verwertungsgesetze〕への障害、つまり資本が資本として価値増殖できる諸限界への障害はあるのである。moneyed Capital そのもののプレトラは必ずしも過剰生産を、あるいは資本の充用場所の不足を表現するものではない。

ちなみに次のことを考えるならば、すなわち、moneyed Capital の蓄積とは、ただたんに、貨幣が貸付可能な貨幣〔verleihbares Geld〕として沈殿する（あるいは貸付可能な貨幣〔verleihbares Geld〕という形態をとる）ことであって、この過程は、貨幣の資本への現実の転化とは非常に違うものである（それはただ、貨幣が資本に、それ自体としては自由に処分できない資本に、転化されうるような形態での、貨幣の蓄積にすぎない）こと、この蓄積は、すでに指摘したように、現実の蓄積とは非常に違った諸契機を表現していることがありうること、——こうしたことを考えるなら、現実の蓄積が絶えず拡張されている場合に、貨幣資本の蓄積の拡張は、一部は現実の蓄積の拡張の結果でもありうるし、一部は現実の拡張にともなってはいるがそれとはまったく違った諸契機の結果でもありうる（〔両者の〕対立〔の場合〕は度外視するとしても）〔ということになる〕。現実の蓄積からは独立していながら、しかもそれに随伴するような諸契機によって、moneyed Capital の蓄積が膨張させられる、という理由だけからでも、循環の一定の諸局面ではつねにこの moneyed Capital のプレトラが発展せざるをえないのであり、また、信用制度の発展につれて、このプレトラが発展せざるをえないのであり、したがって同時に、生産過程をその資本主義的諸制限を乗り越えて駆り立てることの必然性が——過剰取引〔Overtrading〕、過剰生産〔Overproducing〕、過剰信用〔Overcrediting〕が——発展せざるをえない。しかもこのことは、つねに、立ち直り〔rebound〕をよび起こすような諸形態で起こらざるをえないのである」。

後段の Paragraph には、「すでに指摘したように」とあるが、それに相当する箇所は本稿の第5節で引用しておいた、「これまでに説明しておいたことで最も重要なのは、収入のうちの消費に向けられている部分の膨張 {この場合労働者は度外視する、なぜなら労働者の収入は可変資本にイコールだからである} は貨幣資本の蓄積として現われるということである」、という文章で始まる Paragraph、ならびに、「{資本(使命から見て)への収入の再転化とはさらに区別されるべき、貨幣資本の蓄積の二つの形態」、という文章で始まる Paragraph のことを指している。

「資本のプレトラ」という本来の問題に戻るならば、前段には、「しかし、もしこの新たな蓄積 [monied Capital の新たな蓄積のこと——筆者] がその充用にさいして投下部面の不足 [この部面が必要な資本で飽和状態にある [saturated] ということ——筆者] から生じる困難にぶつかる……とすれば、このような monied Capital のプレトラ が証明するものは、資本主義的生産過程の諸制限以外のなにものでもない」、 「moneyed Capital そのもののプレトラは必ずしも過剰生産を、……表現するものではない」、とあること、また、後段には、「moneyed Capital の蓄積とは、ただたんに、貨幣が貸付可能な貨幣 [verleihbares Geld] として沈殿する (あるいは貸付可能な貨幣 [verleihbares Geld] という形態をとる) ことであって、この過程は、貨幣の資本への現実の転化とは非常にちがうものである……こと」、 「現実の蓄積からは独立していながらしかもそれに随伴するそのような諸契機 [一部は現実の蓄積の拡張の結果でもありうるし、一部は現実の蓄積の拡張に伴ってはいるがそれとはまったく違った諸契機] によって、 monied Capital の蓄積が膨張させられる、という理由だけからでも、循環の一定の局面ではつねにこの monied Capital のプレトラが生ぜざるをえないのであり、また、信用制度の発展につれて、このプレトラが発展せざるをえないのであり、……」、とあるところから、ここで言われる「資

本 (monied Capital) のプレトラ」とは、「過剰生産を表現するための一つの特異的な仕方」ではなく、「過剰生産と並ぶ一つの特異的な現象」を指すものであることが疑問の余地なく理解されるであろう。

つまり、マルクスは、「資本のプレトラ」という問題については「最終的な解答」を与えていたというわけである。

ちなみに、この問題にかんするかぎり、大谷氏と筆者とのあいだには見解の相違は認められない。『マルクスの利子生み資本論』第3巻『信用制度下の利子生み資本 (上)』のなかで、氏は、次のような記述を残している。すなわち、「ここでの『monied Capital のプレトラ』が意味しているのは、……たんに『貨幣が貸付可能な貨幣として沈殿する (あるいは貸付可能な貨幣という形態をとる)』ことによって生じる『monied capital の蓄積』の結果としての『monied capital のプレトラ』である。『信用制度の発展につれて』発展するこのようなプレトラも、『生産過程をその資本主義的諸制限を乗り越えて駆り立てることの必然性——過剰取引、過剰生産、過剰信用——』を発展させるのであるが、しかしそれは、現実資本の過剰生産を表現する『monied capital のプレトラ』とは区別されなければならない。『Ⅲ)』の冒頭での問題提起に即して言えば、このような『monied capital のプレトラ』は資本の『過剰生産と並ぶ一つの特異的な現象をなすもの』である」(338-339ページ)、と。

要するに、大谷氏も、「資本 (monied Capital) のプレトラ」という問題にかんするかぎり、マルクスは「最終的な解答」を与えていたことに同意せざるをえなかったというわけである。しかし、マルクスが、自身で提起した問題のなかで、ある問題については「明確なかたちで」「解答」を与えながら、他の問題については「明確なかたちで」「解答」を与えなかったなどということが、およそありうることなのであろうか。

9 マルクスは「最終的な解答」を与えなかったとする大谷氏の論拠——再論

大谷氏は、『マルクスの利子生み資本論』第4巻『信用制度下の利子生み資本(下)』の第12章『『貴金属と為替相場』に使われたマルクス草稿』の『5)信用。架空資本』における第35章原草稿の位置」ならびに「monied capitalと貨幣量との関連の問題」という個所において、マルクスはとりわけ第2の問題にたいして「最終的な解答」を与えなかった(与えられなかった)ことのもう一つの論拠を提示する。

大谷氏は、論点を以下のように整理する。

マルクスは、地金の流出入を考察するさいに、したがってまた為替相場に関説する際にも、地金を monied capital がとっている独自の形態としてとらえることの必要性を繰り返し強調している。これは言い換えれば、ここでの地金の流出入の分析が、実物資本=再生産資本の運動から相対的に独立しながら、その蓄積を促進させ発展させ、ついにはその限界を突破させるにいたる monied capital の運動形態の分析の一環となっているということである。この点から見れば、第35章原草稿は「5)信用。架空資本」の中心をなす、信用制度下の利子生み資本= monied capital の分析の最後の部分を——そしてまた同じ観点から「monied capital と実物資本」の最後の部分と見るなら「Ⅲ」の最後を——なしているということになる。

いま「5)信用。架空資本」が終わったところで、その本論である「現実資本と貨幣資本」で解明されるべきものとして提起されていた二つの基本問題のうち、monied capital と「貨幣の量」との関連について答が出されていたのかどうかについて触れておかなければならないであろう。

しかし、貨幣の量と monied capital との関連、したがってまた貨幣の量

と利率との関連について触れている箇所は、唯一、リカードゥからの抜粋があるだけである。

見られるように、マルクスは *monied capital* と貨幣量とのあいだにどのような関連があるのか、という問題を立てながら、「5）信用。架空資本」の内部ではこれに答えることをしなかったし、マルクス自身も答え終えたと考えてはいなかったと言わざるをえない。

そうだとすると、われわれにとって新たな問題として浮かび上がってくるのは、いったいマルクスは「*monied capital* と貨幣量との関連」について、どういうことが解明されなければならない難問だと考えていたのだろうか、ということである。その解答と見なせるものを彼自身が容易に書こうとしなかった問題とはなんであろうか。そのようなものがなにか確実にあるはずだと考えられるのである。

「マネーが世界を駆けめぐる」現代の資本主義世界では、実物資本ないし再生産から自立化した *monied capital* の諸形態、架空資本の諸形態としてのいわゆる「金融商品」の流通に必要とされる貨幣の量が巨大なものに膨れ上がっている。マルクス自身は直接に書くことがなかったけれども、この貨幣量も「商品」の流通に必要な貨幣の量としては、広義での「流通に必要な貨幣量」であり、社会的再生産を媒介する流通のために必要な貨幣量と渾然一体となって、一見するとそのすべてが中央銀行から供給されている。しかし、このような「流通必要貨幣量」は社会的再生産を媒介する流通必要貨幣量とはまったく異なるものであり、それとははっきりと区別されなければならない独自の「貨幣の量」である。そこで、この両者は *monied capital* の運動と実物資本の運動との絡み合い——マルクスがまさに「5）信用。架空資本」の本論で解明しようとしたもの——のなかで、どのように区別されかつ関連しあっているのか、ということが問われることになる。現代の資本主義諸国とその絡み合いの全体としての現代資本主

義世界のなかでこの問題を具体的に分析するためには、「資本の一般的分析」のなかで、土地をも含む架空資本としての *monied capital* がとる形態としての「商品」の流通に必要な貨幣と実物的な社会的再生産を媒介する流通に必要な貨幣との関連が——しかも産業循環としての社会的再生産の運動の諸局面との関連において——理論的に解明されていなければならないであろう。筆者は、マルクスが提起した、*monied capital* と貨幣量という問題は、このような現代の問題に連携するものではないかと考えている。

以上である。

このうち、「第35章原草稿は『5) 信用。架空資本』の中心をなす、信用制度下の利子生み資本 = *monied capital* の最後の部分を——そしてまた同じ観点から『*monied capital* と現実資本』の最後の部分と見るなら『Ⅲ』の最後を——なしているということになる」、という指摘については、筆者としても、特段の異論はない。

しかし、筆者には、たとえ、マルクスが、「金融商品」の流通に必要とされる貨幣を広義での「流通に必要な貨幣量」のなかに含めて捉えたとしても、あるいは、そうでなかったとしても、やはり、彼は、「貸付可能な資本 [*loanable capital*] の大きさは通貨 [*Circulation*] の量とは異なるものである」、
「この *monied Capital* の量は通貨 [*Circulation*] の量とは異なるものであり、またそれから独立したものである」、
「同じ量の貨幣 [*money*] でも非常に違った量の *monied Capital* を表わすことができるのである」、
「流通 [*Circulation*] の絶対量が規定的なものとして利子率と一致するのはただ逼迫期だけである。このような場合のほかは、流通 [*Circulation*] の絶対量は利子率に影響しない」、という同じ結論を導き出していたものとする。もっとも、筆者には、マルクスは、正しく、「金融商品」の流通に必要とされる貨幣を広義での「流通必要貨幣量」のなか

に含めて捉えていたように思われる。まして、もし、マルクスが、「マネーが世界を駆けめぐる」現代の資本主義世界を分析できるだけの理論を用意できなかったのだ、彼は、monied capitalと貨幣量との関連という問題に「最終的な解答」を与えることができなかったのだ、と推定するならば、それは、門違いの議論と呼ぶべきであろう。どのような天才といえども、自分が生きている時代が要請する課題にたいしてしか理論的に立ち向かうことができない。天才もまた、歴史上の制約を受けざるをえないのである。マルクスは、与えられた歴史的条件のなかで、自身が提起した問題にたいして、「基本的」ないし「最終的」に答えを出しきったと考えられる。

10 むすびに代えて

マルクスが提起した「比類なく困難な問題」についての最善の研究書を二冊だけあげるとするならば、誰しも、小林賢齊氏の『マルクス「信用論」の解明』ならびに大谷禎之介の『マルクスの利子生み資本論』全4巻をあげることにためらいを覚えないはずである。

筆者は、この二著の書評を学会誌に執筆するという幸運な機会に恵まれた。両者からお礼の葉書とメールとを頂いたが、そのうち、大谷氏のメールには、「お前は自分が言いたかったことの半分しか答えていない」という旨の記述があった。おそらく、残りの半分とは、第7節「マルクス『最終的な解答』を与えなかったとする大谷氏の論拠」で紹介した、第3部第5章と第2部第1稿との内容上の関係についての氏独自の解釈を指すものと思われる。こうして、筆者には、大谷氏にたいする「書債」——これは氏が生前に好んで使われた言葉である——が生じることになった。本稿は、この「書債」の返済を意図したものである。